

今週の相場はどうなる？ 今週の相場はどうなる？

作成者：山根亜希子

○8月3日～

先週は日本と米国で政策金利の据え置きが決定されましたが、30日、31日と連日で為替介入が行われたようです。

日銀の金融政策決定会合の金利発表の前日の夜(30日の米国の株式市場が始まる時間)にドル／円レートが1時間で5円ほど円高になりました。

3か月ぶりの介入ですが今回は韓国と米国の協力があったという報道が出ています。

最近の株式市場では日本と韓国の半導体・AI株などが激しい乱高下を繰り返しています。

この動きが世界の市場を不安定にするリスクを高めているとの指摘もあります。

特に、韓国の株式市場では何度もサーキットブレーカー(金融市場の価格急変時に取引を一時停止する制度)が発動しており、パニック売りのような動きが問題になっています。

30日の介入後はすぐに160円台後半までドル／円レートは戻ってきましたが、翌日再び介入があったことで157円台の安値付近でマーケットは終わっています。

31日の米国の介入では、ニューヨーク連銀を通じてユーロを売って円を買う措置を行ったという報道がありました。

韓国との協調介入やドル売りでなく、ユーロ売りの米国の介入というのが今まではとは違う点です。

米国は30日にレートチェックを行い、31日に為替介入を行う可能性についてニューヨーク連銀を通じて、複数の銀行に通知したようです。

円安は米国にとっても放置できないレベルになってきたということでしょう。

FOMCで金利据え置きを発表した後、米国の超長期債(米国債30年、20年)の利回りが上昇したことから、円安放置が債券市場に悪影響を与えることを米国が警戒しているという話もあります。

今回はユーロ売り介入ということですが、ユーロ／ドルのレートは1.15程度です。

これは数年サイクルで見ても平均的なレートです。

ユーロ／ドルの水準は行き過ぎたレートには見えませんが、米国がユーロ売りを行ったことが今後ユーロの動きにどのように影響してくるかも注意して見ておきたいです。

介入の影響から今週の為替相場は荒い動きになる可能性があります。

そして、今週、さらなる介入があるかもしれません。

8月は株式が暴落することも多く、為替だけでなく他の市場の動きにも注意しながら慎重に取引していきたいです。

今週は米国で雇用統計の発表もあります。

また、中東情勢は泥沼化していく可能性もあり、原油価格の上昇なども見ておく必要があります。

● テクニカルで見た重要ポイントは？

今週の相場はどうなる？ 今週の相場はどうなる？

<ドル／円>

先週初めまで163円台後半を維持していましたが30日の介入後は大きく下落し、157円台半ばまで下げてきました。週明けさらに下落していく場合は注意がいります。

前回の5月初めの介入の時は155円あたりで底をつけて、上昇に転じました。

今回、どこで底をつけるか見極める必要があります。

157.5円を割り込むと156円あたりまで下落するリスクがあります。

155円台、156円台にもサポートがあるので、このあたりで下げ止まれば買いを検討したいです。

155円を割り込んだ場合、円高がさらに進行するリスクがあります。

底打ちが確認できるまでは無理なトレードは見送り、少額で買ってみる程度が安全です。

<気になるクロス円>

クロス円もドル／円の急落の動きを受けて、先週後半に大きく下落しています。

ユーロは5月安値の182円を割り込んできそうなので、注意がいります。

2月安値の180.8円あたりで下げ止まればいいですが、180円割れとなると下落トレンドに転換するリスクが出てきます。

クロス円は週足、月足でトレンド転換すると下落リスクが高まるためチャートの形にも注目したいです。

*クロス円とは円との通貨ペアの総称：〇〇／円というような通貨ペアのことです。

<今週のファンダメンタル？>

日本では日銀・金融政策決定会合議事要旨などがあります。

米国では7月製造業PMI(改定値)、7月ISM製造業景況指数、6月貿易収支、6月製造業新規受注、6月雇用動態調査(JOLTS)求人件数、7月ADP雇用統計、7月サービス部門・総合PMI(改定値)、7月ISM非製造業景況指数、前週分新規失業保険申請件数、7月雇用統計などの発表があります。

欧州ではユーロ圏とドイツで6月小売売上高、7月製造業・サービス業PMI(改定値)、ユーロ圏で6月卸売物価指数、ドイツで6月製造業新規受注、6月鉱工業生産などがあります。

ほかには、中国で7月貿易収支、カナダで7月失業率の発表などがあります。